昨日二十七日は、今年最後の本願道場「聞光道」でした。その前日、毎朝奈津美さんと輪読している大石先生の御書信は、ちょうど切りよく最後の第百信でした。第百信「県外聞法会の再開」が書かれたのは、平成十八年十一月となっています。「帰命の関門を通ったら、仏様の御本願は休まれることなく、私の中で歩み続けてくださる」と、先生は止まることのないご本願のはたらきに乗られ、一度中止されていた御法座を再び始めておられました。聞光道でのお話と第百信を拝読した関係で、今朝は目が覚めると、石川県大聖寺の林準芳さん多美子さん御夫妻が代務をしておられたお寺でのことが鮮やかに思い出されて参りました。

　平成十八年、先生は御讃嘆会と称されて御縁のあった方々のお寺を廻り御法座を開いて下さっていました。

　富山県高岡市の超願寺様の御法座も、最後になるだろうとお聞きしたので、私はいつも御法話の中に出てくる超願寺様の御法座に一度お参りしたい、最後の機会に是非お参りさせて頂こうと、同じ思いをお持ちの江島安子さんと二人、誘い合わせて同行させて頂くことにしました。月日は覚えていませんが、私たちははじめてお参りする超願寺様の立派な伽藍に驚き、迷子になるほど広い庫裏をウロウロと探検しました。はじめてお遇いする同行さんたちとも打ち解け、夜はまるで修学旅行のように、二間続きの広い座敷に何人もの方々と枕を並べて休ませて頂きました。

超願寺様の御法座が終わると、その足で先生は石川県大聖寺の浄泉寺に足を延ばされることになりました。まだ北陸新幹線が開通する前のことです。高岡からどういうルートを通って行ったか、もう覚えていませんが、私たちもついて行くことにしました。当時先生の鞄持ちを担っておられた鳥羽百合子さん、友松徹心さん、林純市朗さん、中臣みきさん、講神市子さん、そして江島安子さんと私、もう一人お名前を存知あげない女性がお一人おられました。総勢八名が随行させて頂きました。皆、超願寺様からの一行です。私は浄泉寺に到着すると、そこが大谷派の有名な先生のお寺だったので驚きました。林さん御夫妻が、そのお寺に入寺されたことは知っていたのですが、本当にその先生のお寺だったのだと、驚きを禁じ得ませんでした。その先生というのは、大谷派教団にあって靖国問題や原発問題など、社会運動をけん引し、若い僧侶たちからカリスマのように慕われたＷ先生でした。林さん御夫妻がどうしてＷ先生のお寺に入寺されることになったのか、そのいきさつはその時に多美子さんから簡単な説明をして頂いたような記憶がありますが、よく覚えていません。

　浄泉寺に到着した夜、本堂で御法座が開かれ、地元の御門徒さんも数名お参りでした。その晩は近くの温泉に連れて行っていただきました。北陸の有名な温泉地でした。御法座の連続でしたし、暑い季節でしたから、先生もゆっくりお休みになられたと思います。

翌朝の御法座は、庫裏の仏間でありました。さすが、Ｗ先生のお寺です。床の間にも、お内仏の上にも、大谷派の蒼々たる僧侶方の書が何幅も掛かっていました。私はそれらの光景を眺めながら、大石先生がこの仏間で御法話をされる因縁の不思議を感じていました。ところが先生は、それらのお軸に一度も目を留めることなく、私たちの方を向いてご法話に集中されていました。そのお姿もとても私には印象に残りました。午前の御法話が終わると、昼食を頂いて解散、それぞれ帰路につくという日程でした。多美子さんが用意して下さったカレーを皆で頂くとき、先生が乾杯しようとおっしゃいました。準芳さんと多美子さんが急いでビールを運んで来て下さいました。私もコップに注いでもらい、グラスを掲げました。そのとき先生が「壮行会！」とおっしゃったのです。私は意表をつかれました。普通に「乾杯！」と言うのかとばかり思っていました。「どうして壮行会なの？」という疑問がありつつ、コップのビールを飲み干しました。是が非でも浄土へ連れて行くぞ！という先生の気迫を感じ、鈍感な私の胸にも熱いものが伝わって来た忘れ得ない一コマです。先生のお顔は終始厳しい表情をされていました。

　今、あのときの状景がありありと思い出され、お浄土へ向かっての「壮行会！」だったとありがたく、尊く思い出されます。あの頃の先生は、四十キロに満たない御身体で、最後の御法座を廻られていました。一回一回の御法座が最後の御法座だというお気持ちでしたでしょうし、全精力を懸け、いのちを燃やし尽くされていました。私たちも緊張感をもって臨んでいました。そういう中から出てきたお浄土へ向かっての「壮行会！」でした。「生死を超えて」の願いに生きつづけて下さった先生です。いつもお浄土へ向かって往きましょうと願いつづけ、自らが真っ先にお浄土へと往き生まれ、また今生に還って私たちを浄土へと導いて下さった先生です。特攻隊ご出身の先生にとって「壮行会」というお言葉がぴったりでした。私たちも「いざ、続かん！」という気持ちに自然にならされました。今思い出されても、熱いものがこみ上げてきます。この熱はどこから生まれて来るのでしょうか？

「十方衆生とよびたもう

　　法蔵菩薩は光といのち

　　願いを込めて汝（な）がために

　　南無阿弥陀仏と生（あ）れたもう」

　大石先生作『光あり』の歌詞の一番です。

「法蔵菩薩は光といのち」。

法蔵菩薩というのは、私たちの意識されない深層意識にはたらく仏さまのことです。だれの意識の底にもはたらいてくださっていて、私たちを浄土へ生まれさせたいと、曠劫来願い続けて下さっています。

「十方衆生とよびたもう」

仏さまはいつも「十方衆生と呼びかけて下さっているのですが、われわれは迷いが深いので、なかなか気づきません。仏さまの願いに気づかせて頂くために、浄土真宗では聞法を大切にします。自分で気づくことは出来ないので、教えの御縁を頂かねば一生気づかないままです。南無阿弥陀仏を称えることは知っていても、仏さまのお心を知らねば、呪文と変わりません。「南無阿弥陀仏」と一声出て下さる背景には、仏さまの長きに亘る切なる願いがあるのです。人間に生まれた意味は、この仏さまの願いに気づくことだと言っても過言ではありません。三悪道（さんまくどう）を経廻るしかない私たちが、仏さまの願いに目覚め、浄土への歩みをはじめさせて頂くとき、生死を超えさせて頂くのです。

　昨日の聞光道で、常照さんが親鸞様の御和讃を二首紹介されました。

　　五濁悪世のわれらこそ

　　　金剛の信心ばかりにて

　　　ながく生死をすてはてて

　　　自然の浄土にいたるなれ

　　金剛堅固の信心の

　　　　さだまるときをまちえてぞ

　　　　弥陀の心光摂護して

　　　　ながく生死をへだてける

これらの御和讃は、高僧和讃の中の善導讃です。（聖典四百九十六頁）。この御和讃にとても感動された蓮如様は堺から引き返し、山科にいる同行さんに教え伝えようと、自ら足を運ばれたと伝えられています。蓮如様がお亡くなりになる一年前のことでした。蓮如様がどのように感動されたか、『蓮如上人御一代記聞書き』に記されてありますのを、注釈を参考にご紹介します。

（五濁の悪世に生きる我々は、金剛のように堅固な他力廻向の信心ただそればかりで、生死の迷いを永遠に捨て果て、無為自然の世界である浄土へと至るのである）

という一首と、次の

（金剛のように堅固な他力廻向の信心が定まるとき、そのとき直ちに弥陀の心光に摂めとられ、永遠に迷いの生死をはなれるのである）

とを引かれてお話になり、「この二首の御和讃のこころを皆に言って聞かせたいとおもって、上ってきたのである」といわれました。そして、「ここにはわれわれの得る利益を『自然の浄土にいたるなり』・『ながく生死をへたてけり』と和讃されてある。ああ、なんと頼もしく心うれしいことか」と、繰り返し繰り返し仰せられました。

細川行信先生の注釈を参考にさせていただくと、蓮如様が感動されたのは、信心ひとつで救われることが明示されているからであるとあります。信心を得るとき正定聚に住し、ついには滅度のさとりを得るのであると。

私は奇しくも、昨日の聞光道で、この御和讃をお聞きし、「生死をすてはてて」、とか「生死をへだてける」の言葉に接し、勇気が湧いてくる思いがしました。「生死をすてはてて」の「生死」は、「生老病死」のことです。生苦、老苦、病苦、死苦の四苦です。さらに四苦八苦と私たちが生きている様を言い当てられています。お釈迦様が「人生は苦なり」とおっしゃったことは有名です。私たちは苦を免れることができません。しかし、御和讃によりますと、金剛堅固の信心ばかりは、この苦からながく離れられる、無為自然の浄土へ生まれることができるとおっしゃっているのです。

今年一年を振り返っても、戦争のニュースが心に暗い陰を落とした一年だっと思います。ロシアのウクライナ侵攻に留まらず、ハマスとイスラエルの紛争が連日、絶望的な状況を伝えています。また、国内では、若者にオーバードーズといわれる薬の多用が伝えられました。その前に、結婚しない若者、子どもを産む意志が無い若者が珍しくないという実態が伝えられています。この世に絶望している若者の心が顕れています。私も、仏法に御縁がなければ、今の若者たちと同じように、逃避に走っていたのではと思います。

　この世は五濁の世です。どこにも真実はありません。それを知らせて下さったのが、親鸞様です。「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを　たすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」どうにもならないからこそ、御本願が建てられました。

どうでもこうでもたすけずばおかない弥陀の御本願です。御本願がありますよ、と声を大にして言いたくなります。

　はじめに書かせて頂いた石川県大聖寺のお寺で、私は思い切って先生にお訊ねしたことがありました。それは、私の祖父が放蕩息子の呼び名も高く、あまり素行の良くない人で、四十一歳の若さで、五人の子どもをおいて亡くなったのですが、父や母が四方山話の中で、祖父のことを話すのを傍で聞いていました。当時、次男がいろいろと問題を起こす中で、私の脳裏に祖父のことが頭にあり、祖父の言行が次男に影響しているのではないかという疑問があったものですから、思い切って先生にお訊ねしました。「祖父の悪行が次男に影響しているということがあるのですか？」　すると先生は怖い顔をされて一喝されました。

「二代三代の罪じゃないんよ！」

「曠劫来の罪を背負うているんよ！」

先生の厳しいお言葉に二の句がつけなくなった私は、心の中で「曠劫来の罪っていわれたら、どうしたらいいの？」とさらに当惑しました。未熟だった私は、まだまだ先生のお心が頂けませんでした。でも、思い切ってお訊ねしてよかったと思います。今では、『歎異抄』後序にあります、つぎのお言葉がありがたく頂けるようにならされました。

聖人のつねのおおせには、「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（聖典六百四十頁）

「そくばくの業」というのは、ありとあらゆる業という意味です。私たちはありとあらゆる業をもって生まれています。どんな目にあっても文句のいえない、そういう目に合う因縁をもって生まれているのです。誰の所為でもありません。その中で、腐らずに、諦めずに、淡々と受けていけるみ力を仏さまから頂くのです。自力ではとても受け留められない苦しみを、み仏様にたすけていただいて受けさせて頂くのです。そういう智慧と慈悲の願力が六字に凝縮されて「南無阿弥陀仏」とあらわれて出て下さるのです。頼もしいお念仏です。「金剛堅固の信心」といわれるはずです。

五濁の世、無仏の時、まさしく今日の世界のありさまです。この世はそういう濁った世界であるが故に、濁った世界を見越して、ご本願は建てられたのです。私たちが意識するとせざるとに関わらず、仏さまは久遠の昔より願い続けて下さっているのです。

　先生の「壮行会！」を久しぶりに思い出し、今回の寺報は書かせて頂きました。暗い世相が取り沙汰されるこの頃ですから、一層、浄土を願う気持ちが強くならされます。どんな世の中になっても、絶望せず、明るく輝ける世界がありますと、歩み続けて下さった先生に続いて参りたいと思います。

　年賀状の代わりに常照さんは「通信」を、私は長仁寺報を書かせていただこうと計画しておりました。今日は二十九日です。令和六年が皆さまにとって良い年となりますよう念じ申し上げます。

よろしくお願いします。

浄土の中を浄土へ浄土へ、共に歩ませて頂きましょう。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

令和五年十二月二十九日　　　　　　　　　　　　　　　法喜